

天文用語に關する私見 (9)

(山 本 生)

“遊か、惑か？”

東京帝國大學名譽教授平山清次博士が、「科學知識」第15卷第9號の第288頁に“「惑」か「遊」か”と題して隨筆を寄せてゐられるのが最近に眼を惹いた。“Planet”を“惑星”と譯してゐる人々が東京方面に比較的多いことはかねてから知つてゐたし、殊に此の人々の中でも平山清次博士が最も熱心な主唱者であると聞いてゐたので、自分は此の「科學知識」の文を注意深く讀んだのだが、讀み終つて、實は (frankly) 其のアツケなさに驚いた次第であつた。

Planet を遊星と譯する人と惑星と譯する一派とがあるのは、我が國の幕末時代からの天文文書史にも長い歴史上の混亂や對立があるのであつて、自分などもいつか閑暇があつたら多くの古書について徹底的に之れをしらべて見たいと思つてゐるのである。しかし其れは平山博士の如き先輩が既に一通り研究し盡して居られるのかも知れないと思つてゐたが、此の科學知識の文中には少しも表はれてゐない。否、むしろ其うした博士御自身の研究の結果として、或る場合に博士自身は“遊星”を主張されたことが漏らされてゐる!! しかるにも拘らず、明治四十年頃の若干の學者たちが相談された結果、之れを“惑星”と決定されることになつたので、以後は此の決議に忠實を表して、常に、又、徹底的に“惑星”と書いてゐられるとのことである、

自分も、かなり以前から、明治四十年頃の或る私的會合の噂は少々聞いてゐる。しかし其の會合が全く若干の學者の私的會合といふ以外に、何も社會的、學術的權威のものでないらしく承知してゐるし、殊に其れが何時何所で開かれたかも知られてゐない。従つて、其の會合に誰々が出席されたか (即ち、“決議”といふものの責任者は誰々であるか) を、實は、今まで自分は知らなかつたのである。今此の“科學知識”上に初めて出席者の主な顔ぶれ (寺尾壽、平山信、平山清次、蘆野敬二郎、早乙女清房、一戸直藏) を見たので後日の參考として茲に寫して置く。

此の會合に列席した人々は實際どんな抱負を以つてゐられたか？ 又、果して我が日本語の問題について如何ほどの準備と造詣を持つてゐられたか、其れが知りたいのであるが、しかし其んなことは今から個人に聞き返して見たところで、致し方のないことであろう。只とにかく此の會合は比較的狭い意味の天文學者のみの會合であつて、少なくとも文學者や國語學者を含まず、勿論西洋語學者を含まず、又、日本語譯に最も切實な體驗上の諸問題を有する優秀なるアマチュア天文家や、文筆家(Journalist)を含まなかつたことは確かであろう。——いはゞ、日本語の新造のためには素人ばかりの會合である。此うした事情の故に、此の會合の責任者や内容が今尚ほ發表されず、今日のやうに日本語での天文文書界が非常に大きいものとなつた現代に於いても、決して明治四十年の時の學者のあの會合が權威を以つて文筆界に臨まないで、いつまでも古い昔の學者の私的會合といふ以外に、詳細の知れないまゝになつてゐるのである。——自分だつて、明治四十年と言へば——高等學校生に過ぎなかつたので、若し此の學者の會合の内容が發表され、權威化されて、學俗間に臨んだならば、恐らく自分も此の會合の決議に服したであろう。しかるに如何なる事情にか、此會合が今に至るも單に私的のものとして取り扱はれてゐるに過ぎない有様なので、今日、あの會合に出席した人々のみが、「此く々々決議した」と公言されても、全く仕様がないのである。形式的には、あの會合が私的のものであり、實質的には、其の決議の内容が系統的に發表されてゐない。こんな氣味の悪い會合の存在だけを暗示されたに止まつて、しかも此の會合の決議に同意せよと言はれても、偶然其の會合に出席しなかつた吾々は只迷はざるを得ないのである。一例を挙げれば、こゝに Planet といふ原語があるとして、之れを日本語に譯しようとする場合に、明治四十年の學者の會合の内容が知れてゐない限り、其れは少しも參考にならないので、吾々は止むを得ず、自ら適譯と思ふものを作るか、又は權威ありさうな既刊の文獻をあさる外に途が無い。此の場合に、文部省發行の「洛氏天文學」が“遊星”といふ語を採用してゐるのだから、(他にも此の語を用ゐてゐる書物は、徳川時代以來、澤山ある)吾々も之れを使用するのは、あたり前であると言はねばならない。(つゞく)